

ラジオNIKKEI ■放送 毎週木曜日 21:00~21:15

# マルホ皮膚科セミナー

2016年5月5日放送

## 「第66回日本皮膚科学会中部支部学術大会①

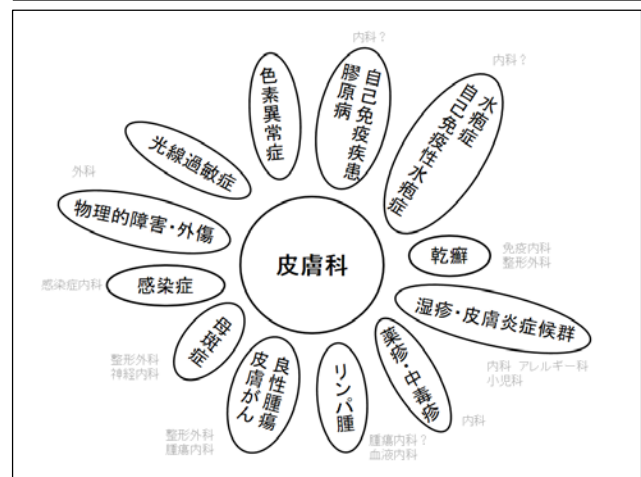
中部支部学術大会を終えて— “輝く皮膚科学” を目指して—

神戸大学大学院 皮膚科  
教授 錦織 千佳子

### テーマは“輝く皮膚科学”

2015年10月31日と11月1日の二日間に亘り、第66回日本皮膚科学会中部支部学術大会を神戸国際会議場で開催させていただきました。神戸大学が中部支部総会を開催させていただくのは5回目で、市橋正光前教授が主催された1998年開催の第49回以来17年ぶりです。

本学会のテーマは、“輝く皮膚科学”としました。これは、皮膚科学が学問的にも臨床的にも躍進して、輝き続けてほしいという願いをこめております。皮膚は“体の鏡”と言われ、多臓器疾患が皮膚病変として現れることから多くの他診療科とも連携しながら発展してきました。しかし、多くの他診療科との接点があるだけに、心がけ一つで皮膚科の守備範囲が広くもなれば狭くもなるということ、多くの皮膚科医が感じているのではな



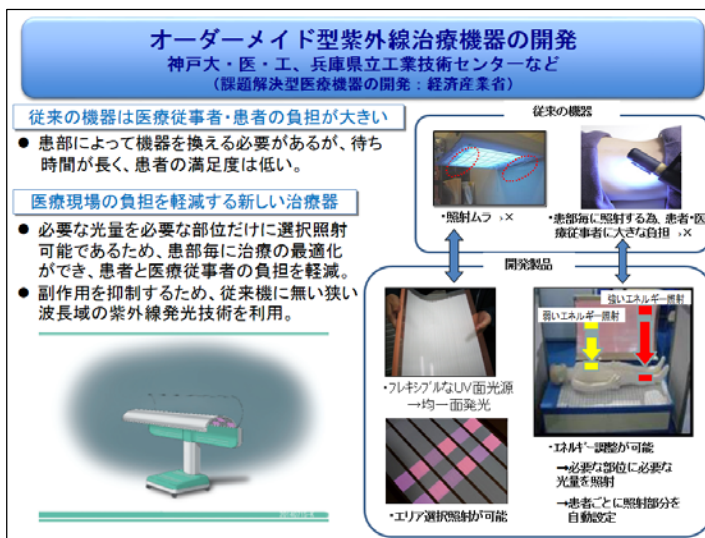
いかと思います。“皮膚を通して体を診ているのだ”という誇りを持って診療することのできる皮膚科医が多く育って欲しいと言う願いをこめてプログラムを考えました。

## 講演内容

学会のテーマは私の専門分野でもある“光皮膚科学”にもかけております。特別講演1には、青色発光ダイオード開発でノーベル物理学賞を受賞された名古屋大学大学院工学研究科教授・天野浩先生をお招きし、「紫外 LED の開発と医療応用」と題してご講演賜りました。お若い頃の苦勞話も交えながら、困難な状況でも一つのことを追求して、それが成就した時の達成感がいかに素晴らしいかを、臨場感交えてお話し下さいました。予算が限られた中で、ビール瓶にコイルを巻いて必要な装置を手作りされたというお話などは、是非若い先生たちにも聞いて欲しいと思うエピソードでした。お金がなくても、やり方次第で自分の目的を達成できること、大事なことは、目標に向かって進むという信念とそれを実現する熱意なのだということ再認識させられました。苦手意識が強かった物理化学の領域への距離感が少し縮まったような気が致します。



今後、学際領域が広がり、皮膚科と他診療科との連携だけでなく、他学部との連携強化も必要となってくるであろうことを視野に入れ、天野教授の講演に引き続いて、シンポジウム「光を使った診断と治療－医工連携」を企画しました。神戸中央市民病院の長野徹先生に光線治療の overview をお願いし、紫外線治療だけでなく光を用いた様々な皮膚疾患治療についてまとめて頂き、光線力学療法を用いた日光角化症の有効性なども著効例を提示しながらお話し下さいました。そして、東京大学の浦野泰照先生には薬学部のお立場から“蛍光グローブの精密開発による術中迅速微小がん可視化の実現”と題して体内の見たい物を光らせるための光増感剤の開発の工夫、そのことにより、直径 1mm の微小ながんの描出が術中に可能となったことなどを、画像を示してお話し下さいました。神戸大の工学部の喜多隆先生には“皮膚科医のニーズに応じた新しい紫外線治療機器の開発”と題して神戸大学と企業が経産省の支援を受けて共同開発した“エリア選択型紫外線照射装置”に搭載する水銀フリーの曲面紫外光



の開発についてご講演賜りました。光の医療応用への多様な可能性を多くの先生に知って頂けたのではないかと思います。

海外からの招待講演では、光皮膚科学・光生物学のオピニオンリーダーである英国 St .John's Institute の皮膚科学教授 Antony Young 先生より、最近関心が高まっている遮光とビタミン D3 の話題「Photoprotection: a balance between prevention of damage and enabling vitamin D synthesis」をご講演頂きました。Young 先生は、イギリス人対象に1週間の南欧への休暇期間中に、広い波長域をブロックするサンスクリーンを塗布した群と主として UVB をブロックするサンスクリーンを塗布した群との比較検討結果から、SPF15 でも指示通り塗布していれば日焼け反応は起きず、それでいて 25 (OH) ビタミン D3 は増加すること、広い波長域をブロックするサンスクリーンの方がビタミン D3 量は高かったことを示しました。長期の影響がどうであるかについても興味のあるところです。

特別講演 2 は、2015 年が阪神・淡路大震災から 20 年という節目の年であったことから、兵庫県災害医療センター長の中山伸一先生をお招きし、「災害医療の現場から一阪神・淡路大震災から 20 年、皮膚科医へのメッセージ」として、皮膚科医としての災害医療への心構えなどについてご講演頂きました。災害初期には“必要な場所に必要の人を配備させられるシステム作り”が大事であることを強調され



れました。また、災害の現場でも結局は日常必要な医療が途絶えることによる負の連鎖が大きいことも話されました。東日本大震災では日本皮膚科学会や日本臨床皮膚科医会主導で皮膚科医を現地に派遣されていましたが、そういう活動の重要性が再確認できました。

シンポジウムは診断・治療に難渋することが多い「自己炎症症候群」と「自己免疫性水疱症」についてオーガナイザーの先生に企画して頂きました。水疱症は皮膚科医以外が診ることは少ない疾患ですが、自己炎症症候群は比較的新しい疾患概念であり、診療科横断的な知識が要求されるだけに診断に至っていない症例も多いのではないかと予想されます。それらの疾患の診断のポイントと重症度の考え方などについてもお話し頂きました。新規に指定難病に認められたこれらの疾患を皮膚科医が新しい視点で捉え、重症度を把握しながら治療していけるような、患者へのフィードバックに役立つシンポジウムになったとすれば幸いです。

CPC も兵庫県立がんセンターの村田洋三先生にオーガナイズ頂き、単に組織を診て疾患を当てるクイズ形式ではなく、重鎮の先生に皮疹と病理組織をどのようにパラレルに関連付けて考えて行くかという観点からご講演頂きました。それぞれの講師の先生の長年のご経験を彷彿とさせる哲学的な講義であったと思います。

教育講演では、皮膚科医として知っておきたい基本的なことから専門的なことも含めて最新の知見についてエキスパートにご講演頂きました。戸倉新樹先生に「痒疹」の極意を、秀道広先生に蕁麻疹治療を、岩月啓氏先生に「リンパ腫診療における皮膚科医の関わり」をお話し頂きました。見落としがちな「皮膚非結核性抗酸菌症」を石井則久先生がお話し下さいました。全身を診るという観点からは膠原病にもウエイトを置き、クロロキンの使用などを含めたエリテマトーデス事情を古川福実先生が、「全身性強皮症」を長谷川稔先生、「皮膚筋炎」を藤本学先生、「血管炎診療」を川上民裕先生と、中身の濃いご講演を頂きました。皮膚科は外科的なアプローチも欠かせませんので、「難治性下肢皮膚潰瘍」を中西健史先生、「皮膚外科のエッセンス 不器用でも大丈夫！」と題して、爲政大幾先生にお話し頂きました。苦手意識が強い遺伝性疾患については、その道のプロである山西清文先生と鈴木民夫先生にそれぞれ角化症と色素異常症についてまとめて頂きました。そして沢田泰之先生には「皮膚科救急にある危険なトラップ(罟)の見つけ方」のご講演をいただきました。後から、「とても勉強になった」「二日目しか参加できなかったが聞きたい講演がたくさんあって選ぶのに困った」という声もたくさん頂きました。大会二日目の午後でも聴衆であふれる会場が多く、多数の学会員が興味を幅広く持ち、勉強の意欲に燃えていることがわかり嬉しく思いました。ご講演頂いた先生にはこの場を借りて改めて御礼申し上げます。

## おわりに

本学会では冒頭に申しました通り“皮膚を通して体を診る”ことに誇りを持って診療することのできる皮膚科医が多く育って欲しいと言う願いをこめてプログラムを考えました。純粋な皮膚科疾患の奥義を究めつつ、他診療科との境界領域にも億劫がらずに守備範囲を広げられる様な皮膚科医になることが患者のニーズに繋がり、ひいては皮膚科学の発展にもつながると確信いたしております。そのことに本学会が少しでもお役に立てたならば望外の慶びです。ご参加下さった先生方に改めて感謝申し上げます。